



高橋浩一郎・内田英治・  
新田 尚 著

第 II 期

気象学のプロムナード

「気象学百年史」

—気象学の近代史を探究する—

東京堂出版 1987年 230頁 3,500円

人類は誕生以来大気の中に住んでおり、気象の変化は生活に大きな影響を与えている。したがって気象学の歴史は人類の歴史そのものであるともいえる。この悠久の歴史の中でも近年の気象学の発展は目覚ましいものがある。例えばレーダーや気象衛星等の観測技術の進歩、コンピューターによる数値予報の実現等である。この近年の気象学発展の足跡を振り返ってみたのが本書である。日本の気象学の歴史について書かれたものは「気象百年史」(気象庁, 1975)をはじめとしていくつかあるが、本書は世界の気象学の発展について、特に過去百年程に焦点を絞って簡潔にまとめられた本である。

本書は、総論、通史、各論の三章から構成されている。各章の内容は次の通りである。

総論……一般的な歴史の意味、気象学発展の背景、時代区分などについて書かれた序章である。

通史……気象学発展の歴史を特徴的なトピックスによって次の様に大きく五つの時代に分け、時代別に社会背景、気象学上の業績、人物の伝記などをまとめている。

- 大古～16世紀 目視観測の時代(ガリレイまで)
- 1600～1820年 測器発達の時代(ブランドスまで)
- 1820～1910年 天気図時代(ノルウェー学派まで)
- 1910～1950年 気象学発達の時代(第二次世界大戦後まで)

1950～現在 大気科学の時代

各論……気象学を主な項目に分け、各々について研究史、考え方の変遷、人物略伝などをまとめている。項目は次の通りである。

- ・観測、測器等
- ・大気の構造
- ・惑星大気
- ・雲物理、降水機構
- ・総観気象学
- ・気象予報
- ・気象力学、数値予報
- ・大気乱流論
- ・大気大循環論、海洋と大気の結合

筆者がかつて習った世界史等の教科書では本書の通史と各論が入り交った様な構成で、全体を通しての大局的な理解がしにくいと感じたものだったが、三章で構成することによりその点がわかりやすくなっている。また、一口に気象学とは言っても以上の様に非常に広範囲の内容をわずか230頁あまりの本書にまとめ上げた点にも著者の苦心の跡が認められる。気象学のあらゆる分野の研究業績が網羅されているため、人名索引が充実しているのも特徴である。古今東西740名余の研究者が載録されており、筆者の様な初学者にとっては先達の業績を知るのに役立つものである。

最後に少々苦言を述べさせていただく。

広範囲の内容を簡潔にまとめ上げたということは反面各々の研究内容の記述が年代、人名、業績の羅列の様な印象を与え、単調な文章となっている。そのため、筆者は一頁から読み通すつもりで読み始めたが、早々に食傷気味になってしまった。できれば研究者のエピソードなどを所々に織りまぜたら興味深い読み物となったであろう。

気象学の大きな流れを知っておくことは、研究をすすめる際の教訓、題目の芽生えにつながると著者は述べている。日頃の研究の合い間にコーヒーでも飲みながら気象学の歴史を振り返ってみると、あらたな発想が生まれてくるかもしれない。

(東京大学海洋研究所 鈴木 靖)